



(奈良・桜井)

## 奈良・唐招提寺

- 1 所在地 奈良市五条町
- 2 調査期間 一九九一年(平3)七月～十二月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 前園実知雄・土橋理子・平松良雄
- 5 遺跡の種類 邸宅・寺院跡
- 6 遺跡の年代 八世紀～現代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、唐招提寺が一九八八年度から行なっている防災工事に伴う事前調査で、第四次にあたる。今回の調査区は、境内主要伽藍

の北半部に集中したが、トレンチが一・二～二・〇mというきわめて狭い幅であることから、検出した遺構の性格を充分把握することはできなかった。防災工事が広範囲にわたるため、1 東室東区、2 宝蔵北区、3 食堂東区、4 西室南区、5

西室西区、6 講堂西・北区、7 本坊南区の小地区に区分して調査を進めた。発掘したトレンチの総延長は四〇二m、面積は六四二㎡である。

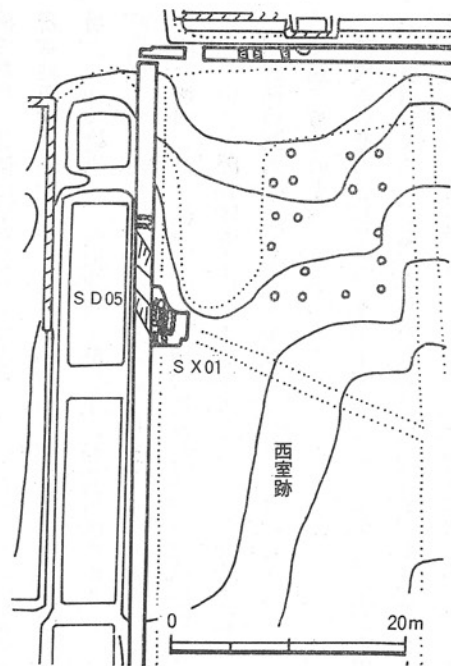
検出した遺構は、唐招提寺創建以前、唐招提寺創建時、中世以降の三時期に大別できる。その中で唐招提寺創建以前の前身遺構と、創建時の主な遺構について述べておく。

まず前身遺構では、1区で東西方向の溝二条を検出した。SD〇一は幅一・三mで、北側石には凝灰岩切石を使用、南側石には自然石を使用している。深さは現状では約二〇cmである。SD〇二はSD〇一の南一・二mのところに平行して走る幅六〇cmの東西方向の溝である。北側に平瓦をたててならべている。これら二条の溝は、講堂地下、東室地下でそれぞれの解体修理に伴って検出されている溝と一連の遺構で、新田部親王邸にかかわる可能性が強い。4区の西端近くで、幅八〇cmで南西方向から北東方向に流路をもつ溝SD〇四を検出した。溝中に径一〇cm、長さ七五cmの円筒形の土管を埋設している。調査区内では三本を確認した。この土管の胎土・焼成が創建前の瓦六〇一二型式と酷似していることなどから、前身遺構に関連するものとみてよからう。

創建時の遺構としては、まず1区から2区にかけて広がる円形の池状遺構SK〇一があげられる。直径約一〇m、深さは約一・五mで、底には粘土層が堆積している。瓦を多量に含むが、鎌倉時代後

半に埋まっている。4区の東端近くでは金堂東回廊西雨落溝とみられる幅五〇cmの南北溝SD〇七を検出し、さらに西一四mのところ  
で幅八〇cm、深さ二〇cmの南北溝SD〇三を検出した。SD〇三からは三彩瓦片、緑釉陶器片が多量に出土している。遺物は奈良時代中葉前後から後半の時期のものを含むため、創建時には機能していた溝とみてよい。5区の北端近く、開山堂跡の西では北西から南東方向に流路をもつ上部幅約二・五m、下部幅約一m、深さ約五〇cmの溝SD〇五を検出した。この溝は横板と杭で護岸されている。下層は暗灰色砂層で、木簡、墨書土器片のほか、多量の土師器、須恵器片が出土した。このSD〇五を東に若干拡張したところ、溝を埋めてその上に築いた幅五〇cmの南北方向の石溝SD〇六と、それを後に利用した幅六〇cmの築地堀SX〇一を検出した。SD〇六はSD〇五が埋められた直後の平安前期、SX〇一は中世以降の遺構と考えられる。SD〇六はその位置からみて、西室創建時の遺構の可能性が強い。

遺物は多量の瓦類のほか、土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・瓦器・緑釉陶器・木簡・土馬片・円筒埴輪片等が出土している。主な遺物として、まず瓦は軒丸瓦六六六点（一型式一三種）、軒平瓦六四四点（一六型式）、鬼瓦一点、三彩平瓦一〇点をあげることができる。緑釉陶器は香炉蓋、碗がそれぞれ一点、碗・杯片が二〇点余出土している。墨書土器には「招提寺」（須恵器皿片）、「招提／佛佛…」



木簡出土位置 (S D05)

〔杯片〕、「招提寺」〔杯片〕、「寺」〔杯片〕、「大衆」〔杯片〕などがある。

## 8 木簡の釈文・内容

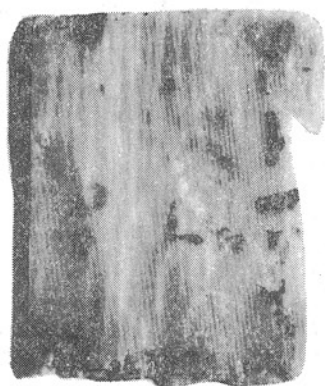
- (1) ・二月五日〔旗カ〕×

法計計×

・正月一日□

□□三□□  
〔目カ〕  
□□四□□

(87) × (68) × 5 081

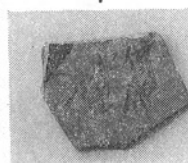
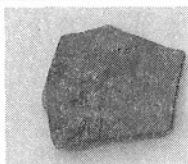
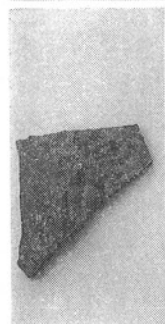


(1)

- (2) □□福観×
- (3) ・□□国□□郡□  
 (屋カ)  
 ・□□郷戸主□

(101)×19×20 061

(122)×(17)×6 039



(表)

(裏)

四点出土しているが判読可能なのは三点である。その中で(3)は貢進物付札で、国・郡の記載がみられることから、郷里制から郷制に切り換えられた天平一二年(七四〇)以後の木簡とみられる。新田部親王は天平七年(七三五)に没していることから、この木簡は親王没後のものとなる。SD〇五の同一層内には、奈良時代後半の遺物も含まれており、唐招提寺造営にかかわる木簡の可能性もあるが、一九六九年の講堂解体修理に伴う調査で出土した天平一五年(七四三)の木簡『木簡研究』八)とともに、新田部親王邸から唐招提寺への移行期の状況を知る手がかりとなる木簡といえよう。

なお釈読については和田萃氏のご教示を得た。

(前園実知雄)